1995年10月の九重火山の噴火

1995年10月11日夕刻に大分県南西部の九重(くじゅう)火山は噴火活動を開始し，星生山(ほっしょうざん)(標高1,762 m)の中腹にある通称硫黄山(いおうざん)付近に新火口を形成した．新火口はほぼ東西方向の長さ約400 mの線上に並んだ火口列で，そこからの噴煙は高度約1,000 mに達した．これに伴う降灰は火口周辺に数十cm程度堆積したほか，南西に約60 km離れた熊本市まで確認された．堆積物のほとんどは古い岩石の破片からなり，10月の噴火は水蒸気爆発によるとみられる．(詳しくは本文33－35頁参照)〈地質調査所　地質部　星住英夫・環境地質部　川辺禎久・大阪地域地質センター　鎌田浩毅・地質情報センター　斎藤英二〉

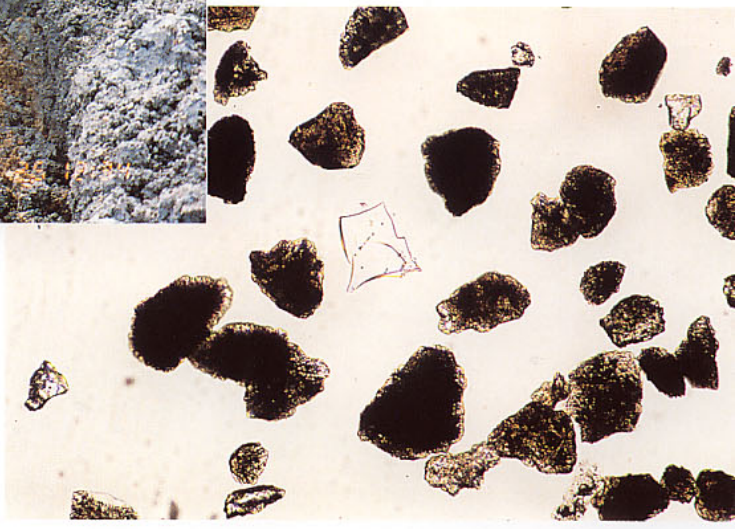
1.東側からみた新火口列：
星生山(右より手前；標高1762 m)の北東斜面に新たに火口列が開口した．火口列は下から上へe火口(火口周囲から暗灰色の泥流が流下)，d火口(噴煙多い)，c1からc4の火口列(噴煙少なく縦に並ぶ)，b火口列(噴煙やや多い)．右下に離れた火口はa3火口．火口名は中田・渡辺(1995，第70回火山噴火予知連絡会資料)を一部改変した．割れ目火口列は全体としてN80°W方向に伸びるが，詳しく見るとE-W方向のミ型に雁行している．(1995年10月18日9時に撮影)

2.新火口列と硫黄山噴気群：
噴煙の右上の稜線が星生山．その左側(東側)で白い噴煙を上げているのが今回の噴火によってできた火口列．手前の尾根から右の噴気地帯は以前から活動を続けている硫黄山の鉱山跡の噴気．噴煙の左下の盆地が北千里ヶ浜．写真手前の小屋のところが諏蛾守(すがもり)越(10月25日11時，星生山北東の三俣山より撮影)

3.西側からみた割れ目火口列：火口列は左下から右上へa1火口(白煙をあげている)，a2火口(直径30 m，噴煙弱い)，b火口列(一番手前は活動を停止)，c1，c2，c3，c4の各火口列(雁行状に縦に並ぶ)，d火口(噴煙多い)そしてe火口(火口の回りが濡れている)．これらの配列からやや離れて写真中央上端にa3火口．
(10月18日9時に撮影)

4.西側地表から見た火口列：人物の左側がb火口列の東端，右側へc1，c2，c3，c4の各火口列が見える．d火口とe火口はc4火口列の向こう側で見えない．人物の足下は，今回の噴出物に厚く(このあたりで30 cm程度)覆われている．
(10月25日13時に撮影)

5.b火口列近くでの噴火堆積物の断面：堆積物ここでの厚さは27 cm．茶色く見えるのが旧地下から細粒火山灰(5 cm)，礫混じり粗粒火山灰(cm)，淡灰色火山灰(2 cm)，火山礫層(雨による次堆積物？，5 cm)，粗粒火山灰（2 cm）と重る．礫は径数mm-数cmで変質岩からなる．軽やスコリアなどマグマに直接由来する本質物質含まれていない．
(10月25日13時に撮影)



6.火山灰中に含まれるガラス片の顕微鏡写真：火山灰中にはごく少量の(1％以下)清澄なガラス片(写真中央)が含まれる．ガラス片はブロック状無色透明で，気泡をほとんど含んでいない．写真左下と右上のやや小さな透明な破片は斜長石．その他の大部分を占める黒っぽい粒子は変質岩の破片．写真の横幅は約1.2 mm．
(試料は10月25日にb火口列のすぐ北側で採集)